
STELLAR CLOCK

タナバタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STELLAR CLOCK

【NZード】

N6770V

【作者名】

タナバタ

【あらすじ】

北海道、某所。街の中心にある大きな星時計。通称・ステラクロック。そこには都市伝説があった。

『このステラクロックで願い事をすると必ず叶う』

そんな都市伝説を信じる純粋（？）な女子高生が一人。名前は 蠍火 香恋

その都市伝説を使って恋を叶えようとする純恋物語。たぶん。

ところが、ある日、天文部のみんなで合宿をしようと自然公園に行くのだが、そこである事件に巻き込まれてしまつ…

1 · Dream Dream

ある駅の大時計が深夜12時を指す前に。

子供はみな寝静まつた夜に一人、佇む者がいた。

そして彼女が空を見た瞬間、一斉に駅から最終電車が出発する。その後ものの1分もしないうちに星の大時計がきつかり『一人』を重ね合わせ、時を告げる。

彼女の視野にはまるで自分がこの夜空に呑みこまれてしまいそうなくらい、大きく、そして綺麗な星たちが瞬いていた。

「よし、今日も頑張るよっ！…」

元気よく自分を高めるように言ったのは『蠟火香恋』
星城高等学校3年生。今年が受験の時である。

「…とりあえず帰らなきやな…って、最終電車が無い…？？？」

彼女は駅のホームを見渡すと、電子ボードに光る文字は、既にもう無かつた。

券売機も販売終了の文字が赤くくつきりと表示されていた。

「…あれ…いつもはこんな時間にならないんだけどなあ。。。」

「そもそも私、なんでここに居るんだろ…。」

焦りの表情が目に見えて浮かぶ。

そんな中、焦つていてる一件の着信。

幼馴染、獅子ヶ谷麗音からの着信である。

「あ、麗音…。嘘…」のタイミング…？」

焦りながらも一つ深呼吸をして、電話に出る。

「も…もしもし…？」

「…まあ、その様子だと電車を乗り逃してホームで拳動不審になつてこる最中…？」

「な、なんで分かったの…？」

「だつて後ろにいるから…。」

やつぱつた電話の相手は彼女の肩にポン、と手を置く。

「うわあああ…？？？誰ですか…？？？」

「いや、だから俺だつて」

「なんだ麗音か…。」

「いや、さつさつした。聞けよバーカ。」

「それはともかく…。終電のがしきつた。」

「…つたぐ、お前はビリをぬつて歩こてやがつたんだ？」

少し考えてからいべきか迷つた挙句、結局言つ。

「狐小路あたりを……ちよつとね。」

「……またお前、スカウトだのに捕まつてたのか？」

「ええ……まあ。うそ……。」

しょんぼりしながら香恋は囁く。

「……とりあえずほり。迎えに来てやつたんだ。感謝しな！」

麗音は香恋の手を取り、駅の外側へと歩き出す。

「ちよ、ちよ、何処行くのー？」

「タクシー拾うに決まつてんだろ？ほり、自分で歩け。」

「あ、ちよ、待つてよー。」

二人は星の大時計の真下をぐぐり、イルミネーションの方へと歩き出した。

^ ^ ^ ^ ^

「……つていう妄想……。じゃなくて、夢を見たのよー。」

「……はいはい。それはよかっただですね~」

よしよし、と、香恋ではない方の女子は頭をなでる。

彼女は『瓶井水樹』

かめいみずき

香恋とは違い、クールで穏やかな性格。結構乗り気も良い優しい親友だ。

「と、いかがおおじつかつて彼はなこに来たのよ？タクシー拾つとか言つてゐくせに…。」

「だーかーらー、夢なんだつて…。」

「まず貴方達は幼馴染じやないし…。」

もしアニメ化とかだったら誰がナレーションするのよ？」

「そりやあ…夢なんだから私じやない？」

「誰でもこにナビ。」

「つわつ、酷い…。」

と、こによつてひづ氣もある。

そこで、学校のチャイムが校舎内に鳴り響く。
担任の熱意ある（？）声が今度は教室内に響く。

「おー…席に着けよ？こか、いいな？きつーつー…礼ー…。」

「おはよー、じゅーす…。」

「ウーハース…。」

「は？」

「ねえねえ、『ウエハース』って口もつて言つたら『おはよウ』ざいます』に聞こえない？」

「そんなどうでもいい事考えてたら教科書読みなさいよ…。」

「なあに? 低血圧? あらやだ年増あ…。」

「悪かつたわね、年増で。」

「ほんと、水樹は姿ならイケイケののしつて感じなのに…これで高校生かあ」

「大人っぽい、とかそういう言ひ方出来ないの? もう…」

水樹はため息をつきながら席を立つ。

「何処行くの?」

「ちよつと購買行つてくるよ。香志も来る?」

「奢つて~」

「死になさ~」

「…御免なさい」

水樹のこの一言でいつも香志は撃沈されたのであった。

2 · Sweet Sweet

：購買：

「奢れよ～少しくらいこいだろ？」

「…お前には昨日俺が奢つただろ。今日はお前な。」

「え？ マジか！ ？ ジャ あ奢らないとな…。」

そう言つて財布を取り出す少年。彼の名前は『秤谷 天』はかりだに たかし』
スポーツ大好き少年。…少しばかり馬鹿で、騙されやすい傾向にある。

そしてその話相手は『獅子ヶ谷 麗音～しげや れおん』
香恋の妄想…いや、夢に出てきた少年。この二人は苗字に『谷』が入つているためにまとめて谷と呼ばれることがある。

「あ、谷がいるよ。」

「おーい、谷！」

「「俺らをまとめて呼ぶんじゃ ねえ…！…！」」

そつ眞つていいる割には息もぴつたりである。

「…息ぴつたりじゃん。」

「~~~~~」

「おこ香恋テメえ、爆笑してんじやねーよ……」

「……つたぐ。で、何の用だ?」

と、言いながらさりげなく麗音は天から購買の一一番人気、『ふわふわプリン』をかすめ取る。

「ああ……おい麗音!……それ俺のだぞ!……」

「あ?お前、わざわざ奢るつて言つただろ?」

「……あ、あ、せうだつたな。やるよそれ。」

「あつせつー?」

「なんで奢るの?」

「昨日、俺が麗音に奢つたんだ。だから俺が次に奢る番で……ってあれ?」

「俺、一回連続じやね?」

「アホだ。」

「馬鹿だ。」

「間抜けだ。(もじやもじや)」

麗音は既にプリンを開けて食べていた。

「お前ええ！……騙したなああああああああ！」

「おひどい、どうせひきのうに触れたか？」

右手にプリンを持ち、プラスチックのスプーンをくわえながら戦闘態勢に入る。

「おりえのプリンはわたすあぬええからせー!」

「俺のハーツに渡さねーからな?」

水樹力話を返す すねと

「しかし!! (正解)」

ヒシシと水槽に指をさす。か

「…黙つてりやあイケメンなのになえ。」

11

香恋は黙り込む。何か言いたげだな、と水樹が察し…

「ああ、ごめん、普通でもイケメンか？」

「うん。」

「返事はやつ。光並み！？」

顔は変わらないけれど…と、水樹は言った。

その水槽の銳し突き込みもまた光並みの速度たゞたゞ

「いやお前意味分かつてないから。それ。」

「喰らえええ！！必殺、仕事人！！！」

「だからそれも必殺技の名前じゃないって。」

麗音は振りかざしてきた腕を素早く避ける。

「ほこわい。」

「どう… まあ… ？」

ドナツ。

天が倒れる。

「あ……やべえ、またやつあいつた……。」

「ちよつ、また鳩尾アタック！？」

「え、お前つけてるのそれ？」

技を繰り出した本人が訊き返す。

「とりあえず保健室保健室ーー！」

r < h >

「……………アーヴィングは？」

まつたくどいまで食い意地の張つてゐやつなの?
ベッドで寝て居ながら寝言がそれつて……

「全くだ。」(おこりもこりも)

「あんたも！！！」

先生は麗音に向かって先ほどどの鳩尾アタツクなるモノを繰り出す。

「先生強つ
」

『國語』

「…貴方達、まだ1時間目も始まつてない状況よ？」

ちょっと怒り気味で言つたのは看護教諭の『星沢 鈴』ほしがわりん』先生だ。

まだ20代前半らしく、美人の先生。

「す、すいません。」

「じゃあ……放課後、一いつの掃除任せるからね？」

「えー！？」

「何か文句でも？」

「…御免なさい。ないです。やります。やりさせてください。むしろ土下座してまでやります。」

「言い心がけだつ。」

「先生怖つ」。

「さーあ、とつとと教室戻る！－！」

一
は
い
・
。

はい は短く！！！

「はいっ！」

昼
休
み。

「でね、まだあの夢には続きがあつて…。」

「 もうその話は良くなわよ。」

「 麗の…思って出せないのよ…その続きが…。それと、その前も…。」

「

「 起べあるじとでしょ？夢なんて…。」

「 でも…何か重要な事を言つてた気がするんだけど…。
それに、あれは夢に思えないほどリアルだったんだよ？」

「 はいはい。じゃあ夢に出てきた本人に聞いてみれば？麗音…。
ね？麗音？」

「 あ？（もしゃ もしゃ）」

麗音はチラリレートクリーミパンを食べていた。

「 …あんた、何かと物を食べてるのね。よく太らなにゃ…。羨ましい。」

「 ああああ良この…夢の事は…。」

香恋が慌てぬ。しかし…

「 夢…ああー、もう…今は今田見た夢にお前が出てきたんだ。」

「 …え？」

「なんか、駅の改札口で、惑つて俺が声をかけたんだ。なんつたかな……」

「……待つて。その前に私に電話しなかった？」

「ああ、してたな。そこでお前に終電乗り遅れたのか？って……あ？」

麗音が喰つていたパンを落とす。

「……ちよつ……それつて貴方達おんなんじ夢見たつて事……？しかも会話してゐし……」

「そ、そんな馬鹿な……そんなことあるわけないだろジョーシキテキニカンガエテ」

「常識的に考えても女子高生的な考えでもあり得ちゃつてるんだけど……。」

「夢が……繋がつてゐる……」

少したためから香恋はこいついた。

「スティラクロックのおかげだあ……。」

「ステラクロック…？」

「なんだあ？ その…すてらなんちやらつて。」

「…あつ、ちよつ…。」

香恋は少し慌てる。

そして水樹に小声で言つた。

「好きな人いるのにダメだよね、これ言つたら…。」

「…確実にばれるわね。」

「ヤバいやばい…」

「おい、何話してんだ？ 教えるよそのストアなんちやらつての。」

「なんでコンビニなのよ…。ステラクロック。星の大時計って言つたらわかる？」

「えー…ちよつ、水樹！？」

水樹は香恋の口をふむぐ。そして続けた。

「香恋、貴方はジジなんだから麗音にまじりしかやつでしょホントの事を…。」

「ほお、ほおつかあ……。」

「放火?」

「何物騒な」と言つてんのよ……。」

バシャイッ…

「ぐつぬあ……あ……」

水樹が麗音の腹を殴る。
びつかり強て的こは 水樹へ麗音へ天 らじい。

「ヤバ……またやつちやつた……。」

「またー!?」

「あのね、水樹は空手やつてたんだよ?しかも8段。」

「御免なさい弟子にしてください。」

「弟子は持たないと決めておるのだ。(ドヤア)」

「ノッた!?」

「あいいわ……」

と、水樹は香恋にこいつとこいつ。

「……やつぱつ、別の話題を振るとさうに引き寄せられたから」の

回避法で行きなさい！

ただし…あまりやり過ぎると効果は薄くなるからね…。

「あらがとおううう 水樹！…！」

香恋は頬ずりをする。

「ちよひ、やめてよ…！」

わずかながら照れ隠しをする水樹だった。

「せつーつ、れーい…それならー…！」

田直の威勢の良い声が教室内に響き、放課後が訪れる。

「じゅあ部活行つてへるよー。」

「うふ。じゅあ私も頑張つてへるよ。」

「じゅーねー、また明日ー。」

「…まにはー。こつものじとじよー。」

このやつとつを毎日してから部活動は始まる。
香恋は天文学部で、麗音と同じだ。

「わーい、今日は何するのかなー。」

香恋が部屋のドアを開くと、既に麗音が待機していた。

「おせーぞお一人で退屈なんだからなあ？」

「はいはい。じゃあ今日は…何するの？」

「ああ？ 2週間後の合宿の計画を立てるんじゃないのか？」

「が、合宿うーー？」

「…お前、また寝てたのか？」 昨日話しただろ？ 天文学部の奴らで天体観測合宿に行くつて。」

「…しまったつ。すっかり忘れてたつ。うっかりしつかり忘れてたつ。」

「いや、それぢちの意味だよ。」

「あら、二人ともそろつてたの？」

「揃つてたとはなんだ揃つてたとは。」

「美海ーおかえりんーー」

「ただいま…………ちよつと廊下來なさい香恋。」

「ええー…ちよつ、私悪くないよ…」

「…つたぐ、あいかわらず香恋は分からずに変な方向に持つてくし、糸魚川は気にし過ぎるし…」

香恋を廊下に連れて行つたのは「糸魚川 美海」といがわ みづ

水色の髪の毛で長髪。リボンでポニー テールにしてある。

性格は純粋無垢… 多分。下ネタには敏感なので、知識はあると思われる。

「香恋ーそこは『おかえリンボー』にすればよかつたのよー。

そうすれば私も『ただいまンボウ』で華麗に返せたのにーーー！」

「わつこつ問題つー? しかも華麗なのー?」

「いえ…『おかえりん』ー』でも良いわね。

それならば『ただいまンボー』で返せてフルーツの2コンボ達成が出来る…。」

「こつも通りーこつは医者もお手上げのバカだな。」

「おー、大和。はつぴーな羅夢もいつしょか?」

「…『ル』のハッピーセットみたいな言い方やめてくれない?」

「いいじゃねえか。大和がいないときは子羊ちゃんなんだし。マックにはラム肉は使われてないぜ?」

「やつぱりハッピーセットが元ネタなのか…。」

この一入一緒に来た男女は『幸村 大和』ゆきむら やまと』と『

幸村 羅夢』ゆきむら らむ』

このふたりは双子であり、父親が別の複雑な兄妹。

そしてどちらも父親がいない。他界したのか…別れてしまったのか

本人でも分からぬいらしー。

ハッピーセットとこりのせ、」の一人が揃うとこり呼ばれる。
苗字が幸村なので、ハッピー、一人でハッピーセット。
…無論、おもちゃなんかは付いてこない。

「で、全員揃つたとこりのせ、今田はこのメンバーで合宿をするとこり
計画を企てる。

俺、麗音と香恋、糸魚川、射手、ハッピーセットだ。」

「だからハッピーセットはやめろつてーの。」

「ああ、一つ言つてなかつたが今日は射手が来られない。俺から伝
えておくから安心しろ。」

「無視い！？」

「えー？ 桜ちゃん来れないのかあ…。」

本日、欠席しているもう一人のメンバーの射手桜。
かなり女の子っぽい女の子で、男子が苦手。天文学部の仲間とは普
通に喋れるようだが普段は如何に。

髪の毛はピンクのロング。料理が苦手、裁縫は無、音痴、など、
やつこつた面は女の子らしくは無い。

「場所はどこの所なんですか？」

「星ヶ丘丘陵公園なんてどうだ？ あそこは空気が澄んでいて綺麗な
星が見れるぜ？」

「おー、それいいなー。」

「ねーねー、」飯は?」

「…香恋はそればかりですわね。私がちゃんと食材を持って行つてあげますわ。」

「…勿論、一つのバンガローを借りてやいで焼き肉だー。」

「やつたああ?」

香恋は美海に抱きつき、頬ずりをする。

「やつたああ?」

「…あー、なんか盛り上がりが悪いんだが、今一つのバンガローって言つたか?」

「ああ。それがどうかしたか?」

「…俺らは兄妹だからそんなに気にしないがお前ら男女は気にしないのか?」

「や、やつでしたわね…」

美海が考え込む。

「(…え…!)」で否定したら麗音と一緒に寝れないし…でも否定しなかつたらそれはそれで変だし…」

「まあ、いいじゃないですか？たまにせいいひこのも。」

香恋からすると、あまりにもあつけなた週末を少し茫然とした。

「え…結構そひの氣にあるんだからなあつて思つたんだけど…。

」

「男子は一人だけですし、そのためだけにバンガローを一つ借りるのは痛い出費ですね。」

まあ…今日は居ない桜さんが氣がかりですけど。」

「ああ…射手ならもう許可してくる。こや、せせた。」

あつぱりと答える麗音

「許可させた…？無理やつ…？」

「だつてきかねえんだもの…。許可しなかつたら俺とポッキーゲームやるぞ」の野郎つて言つたら全力でOKしてくれた。」

「…確かに究極の一択だが…哀れ射手。」

「いいなあポッキーゲーム…。」

「あら、何か言つました？香恋さん。」

「べ、別に何も言つてないよ！」

「よし、それじゃあ何の星座を調べて研究をしてコンクールに出場

するのか決めるぜー。」

「おー！頑張りつせー。今度は最優秀賞を取るんだー。」

「バンガローでガンバローーーー。」

「…」

「……あー。」

「…「う。」

「…あれ？あれ？皆頑張らないのーーー？」

「…お前やっぱ気付いてないのな。」

「…気付かずにダジャレを言つて空気を凍えさせねーーー。」
「雪女か。」

「ダジャレを言つたのは誰じやー。」

「…お前確信犯だろ。」

「おーい蠍火！……麗音……届かあーー？」

部室の窓の外から威勢の良い声が聞こえる。秤谷だった。

「あーー？なんだー天ー。」

「天君どうしたの？』

「今何やつてるー？』

「今は合宿の計画立ててるといひだー！」

「俺も行つて良いかー！？』

「え？」

「この人は何をしに行く合宿なのか分かっているのだろうかと香恋は
思つた。

「ああ？お前、星に興味なんてあつたか？』

「いや、ねえけどさ、キャンプみたいなのつて楽しそうじゃないか

！』

子供みたいにはしゃぐ天。公園に着いた時の天の姿が田に浮かぶよ
うだった。

「あー…別に良いけどよ、お前、テントな。」

「勿論、そのつもりだぜーー！」

「うー、決定ー。変更は氣かねえからなー。」

「あ?え、いやちょっと待てよお前らもテントだろ?」

「俺らはバンガローだ。」

「バンガローでガンバ…」

バシツ

殴られた。

「痛い…。」

「言わせねーよ。」

「俺一人かよー?マジでー?」

「お前、そのつもつだつたんじやないのか?」

いたずらな顔の麗音はまるで子供の時に戻ったかのようと思えた。

「じゃー私も行って良いかしら?」

「あー水樹!!部活終わったのー?」

「うん。だから一緒に帰らうと思つてね。」

と、柔道着を片手に持つ水樹。

「ああ。お前も来いよ。だが、テントな。」

「あんなバカと一緒にクソ喰らえよ。あんたが行きなさい。」

吐き捨てるように行つた水樹。少しだけ天が可哀そりになつた。

「あー…じゃあ香恋と一緒に寝袋な。ここにしあわせにし。」

「私ちつちやくないよ…」

某アーメの迷宮詞を囁き香恋。

「まあそれでもいいわ。楽しそうだし…」

「なんか賑やかそうな合宿になりそうだな。」

大和が囁く。

「せしたら…これくらいにして帰るか。合宿が楽しみだな。」

「うん。じゃあ、また明日ねー。」

こつして、天文部＆2名は解散した。

香恋と水樹の二人は電車通いなのでいつも駅の中を電車を待っていた。

「香恋さア、いつ会うの？」

「ばつ、なつ、なあ——！」

手足をばたつかせて慌てふためく香恋。恥ずかしさを隠すために必死なようだ。

「バナナ？ あんた好物だっけ？」

「バナナは固くないよ……男の人の以外はね……」

香恋は自分でも何を言っているのかも分からていなかつた。

「それは鉱物でしょ——ついでにどうぐたに紛れて下ネタを言つなあ——！」

バシッ

と、水樹のチョップによる制裁が香恋に下つた。

「痛い……。今日殴られてばつかり……。」

「あつ、電車きたみたい。」

「人の嘆きすらも無視いッ！？」

そんな最後の香恋の嘆きは水に流され、二人は電車に乗つた。

「香恋は黒石駅で降りるんだったね。次の次か。」

「水樹はもつと遠くの大自然の中で暮らしてるんだったよねー。」

「どーだよそー。確かに私は森林公园駅で降りるけど。」

「心理公園…どんな心理テストが待ってるんだ…。」

「いや、あんたは心理テストしなくてもバカだつてことが丸わかりだよ。」

そんな馬鹿げた会話を終えて香恋は電車を降りる。

「じゃ、また明日ねー。」

「うん。また明日ーーー。」

電車が見えなくなるまで手を振ると、香恋はステップ調で帰^モした。

そしてそんな平和な日が何日も続いていつしか合宿前日になつた。いつも通り全授業終了のチャイムが鳴り終わるとビタッシュで香恋は天文部のドアを開けに行く。

「たのもーーー！獅子ヶ谷麗音に挑戦しに来たぞーーー！」

「あーにぐ柔道部はーにじやなくて格技場だ。他を当たれ。」

「いつも通りの突っ込みありがとおーーー！」

「お前の頭の中はネタ帳か？毎回違うボケがましやがつてーーー。」

「僕は神様のネタ帳を見たことがあるんだ。」

「メモ帳だろーーー！」

そんなどつかの一ート探偵の言葉を引用するなーーーと、ノリ突っ込みを忘れない麗音。

「んー、今日は集まり悪いね。まだSHR^{ショートホームルーム}やつてるのかなあ。」

「そりなんじやねえの？まあ俺はお菓子食つて待つてるから良いくらいよ。」

「おー、ポッキーガールに成れそりだよーー麗音ーー忽那 里さんよりそり食つてポッキーを一本、口にくわえる。」

「おー、ポッキーガールに成れそりだよーー麗音ーー忽那 里さんより

美味しそうに食べてるよー。」

「いや、俺男だし…。」

そもそも俺よりも美味しそうに食べる奴はいくつもいるだろ、例えればお前とか…。
とかなんとか言つてゐるうちに、人がパラパラと集まってきた。

「うーーっす。わりい、SHRが長引いきまつて…。」

「おお大和か。んー、おもちやつしきじゃないか。」

「なんで私がこいつのおもちやなのよ…。」

と、ハッピーセットが入場。

「ハッピーセットっていうなーー。」

「お前ら、誰に突つ込みしてるんだ?」

「え? ああ…ナレーター。」

「居るのー? ナレーターがこの話をしきりやがてるのー?」

「もうそんなどこには慣れーたー…」

パカンッ

ポツキーの空箱で殴られる番恋。

「痛い…。」

「おまえ、笑顔で出でなよ。きっと大ウケだぜ？」

「いやー、眼鏡が無いと田の焦点が合わなくて…」

「お前「ンタクトだろ。」

「やつちー？」

「相変わらず賑やかですわね、この部室は。まあ、それが好きなんですけども。」

「おっす美海。ポッキーゲームやるか？」

「なんでこきなりそつなるんですのー？」

脈絡がなさすぎるーと、美海は思つた。

「冗談だ冗談。」

「後は桜ちゃんと水樹と天君かな？」

「ああー、水樹と天には伝えてある。大丈夫だ。」

「問題ない？」

「一番良いのを頼む。つてオイ」

「後は桜ちゃんね…。」

その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「あ、桜ちゃんかな？」

「おう、今あける……」

「あつ、麗音が開けたら……」

「こんにち……わああツツー……」

ドスツ……

「うひつふお……？」

ドサツ

と、麗音が鳩尾にグーパンを喰らい、その場に倒れ込んだ。

「あつ……またやつちやつた……」

「つわわわわ御免なさい……（。 。 । । ）」

と、倒れた麗音にかけよる射手桜。こいつが麗音を瀕死に追い込んだ張本人である。

「うわっ、おい誰かげんきのかたまりを！」

「いや……回復の薬で大丈夫だ……」

と、鳩尾パンチに慣れているのか麗音が立ち上がる。

桜は男が大の苦手で天文部の仲間たちは大丈夫なはずなのだが、突然目の前に現れると殴つてしまふ癖がある。

「つたぐ……どこの伊波井さんなんだよ……」

「御免なさい……。」（　　）

「お前口ケに物喋れてないぞ」

「あ、僕らがな……」「あ、

あとで温湿布持つておあすー!! (。 。 ; ')」

「痛いのに温めたら逆効果だろ……。ってかお前のセリフって全部顔文字付きなのな……。」

さて。逝くのは星ヶ丘丘陵公園展望台だ。明日の朝10時に現地集合で。

卷之三

「じゃあ私は水樹と電車で逝くー！」

「…電車で事故らないことを祈りますわ。」

「駅からはバスを使って大体30分か。ちょっと遠いが我慢してくれ！」

「六一！」

「さて、それとおまれば身支度から始めるぞ！」

「一つ質問い合わせ？」

おお、はーひー世ーど、
の大きい方！」

……一々突つ込みしてられないな

あそこへ送りて最近
変な匂が漂ってるせいか
人が行方不明になるとか。」

「んあ？ そんな噂が流れるのか？」

ああ。なんか一晩迎えた頃には既にいなくなつてゐるだとか。

「まあ、そんな」と気にしてたらギャンブルなんて出来ないですわ。

「もしかしてそれ、競じゃない？」

「え？ なんで？」

パコオン!!

Excellent!!

「「」」はボーナスステージだったのか…。」

と、麗音が香恋に華麗に殴りかかってるのを見て言つた。

「痛い…。」

「ともかくー明日現地集合ー持つて来れる奴は屈折式と反射式の天体望遠鏡を頼むぜー！」

「了解。」

「楽しみだなあ Wktk!!」

「ワクテカワクテカ (*・、・)」

「…お前、そんなキャラだつけ?」

「しつ、失礼なツ!!最初からこんなですよーー^#、ーー^」

「…そ、そつか…。」

そして当田。

昨夜は楽しみで楽しみでしようとがなかつた香恋。あまり寝られなかつたようだ。

駅で水樹と会う約束をしていたので、会流すためにとりあえずステラクロックのある駅へと向かった。

「あー寝不足だー…。田に隈ができるやつてるよ…。」

鏡で自分の顔を見るなりため息をつく香恋。

「おまたせー。待つた?」

「あー水樹ー私も今来たところだよー。」

「それならいいけど…このオブジェクトの前集合はやめてくれない?」
「ここは東側だけせめて場所も指定して。」

「西側にも白い別のオブジェがあるんだから…。」

「これは失敬失敬…。」

「じゃ、向かいますか。」

「ちよつと待つてー。」

と、香恋が水樹の足を止める。

「ん? なしたの?」

「ステラクロックにお願いしに行こうよ…。
もしかしたらこの合宿で麗音と仲良くなれるよ…」

「そんなつもりで来たのなら帰れ天然バカ娘。」

「ひ、 酷い…。」

「冗談よ冗談。 アメリカンジョークよ。」

「いやそれアメリカンじゃないよ。 ナチュラルフーリッシュガール
って言わないと…。」

「アナタも十分アメリカンジョークできてないわよ。」

そんな会話をしながら、一人はステラクロックの扉の前まで来た。

「（）つて神社みたいな感じになつてるよね。 それなら北海道神宮
に行けばいいのに…。」

「それはあんたにも言えることでしょう。」

「あ、 そうか！ それなら大丈夫だね！」

「なんでそこがポジティブ思考…？」

「そ、行ひやー。」

二人がステラクロックの中に入ると、大きな柱にポスターが貼つてあつた。

「んー？工事をするんだあ。」

何やらそのポスターはステラクロックの内装や外觀をすべて変えるとのことだった。

しかし、どこにもその会社名やステラクロックのマークが無い。少し怪しげな雰囲気が漂つていた。

「…大和ハウチユとかそういうた建築の会社名がないね…。」

「…今噛んだのは聞きのがさなかつたよ…？
つて、あんたまさか本当に大和ハウチユだと思つてるんじゃないでしょうね。」

「えー…？違ひのー…？」

「…はあ。」

水樹が大きなため息をつく。
この先が思いやられるわ…と。ベンチに腰を掛けた。

「どうやら今日の午後からここが封鎖されるみたいだから今日がキ

ヤンプで良かつたわね。

私はここで待ってるから、ほら、流れ星にお願いしてきなさいー！」

「うん！」

香恋は階段を駆け上がり、5階のプラネタリウム展望台に来た。

プラネタリウム展望台は、広い天井中に世界で見られる星、星座が散りばめられている。

しかし、ただのプラネタリウムではなくて世界中のカメラから生中継で夜空を見られる。

勿論、生中継なので今は昼の日本や国以外の夜空になってしまつ。いつしかそこでは流れ星や流星群が見られる事が女子高生の間で話題になり、お願い事が出来る確率がアップするので神社的な場所になってしまった…というわけだ。

「今日は何処の国かなあ。あ、イギリスだ！」

香恋は夜空を眺める。すると、眺めていたその先に、大きな三角形が見えた。

「…あれ、なんで夏の大三角が見えるんだろう…。」

「それはイギリスでは日本と見える星座の位置や角度が違うからだよ。」

と、大人の声が聞こえる。

振りかえると、そこには優しそうなおじさんがいた。

「アナタは？」

「私は蟹江大洋。」このオーナーだ。星は好きかい？」

「は、はい！」

「そうか。星は良い。人の心をよく表している。良いことも、良くないことも…。」

「…え？」

「いや、じつちの話だ。た、存分に美しい星座達を堪能してくれ。」

と、言い残し、蟹江はその場所を去つた。

「…んー。ま、いつか！

あ！－流れ星！－」

香恋はその一筋の光に3回、その流星の光の速さで願いを託した。

「お願い事してきたよー！」

「ん。じゃあ、行きましょー！」

水樹が呼んでいた本を閉じ、立ち上がる。

「ねーねー、じつに優しそうなおじさんきた？」

「え？ あんた熟年好きだっけ？」

「違う違う！！でも、その様子だと来てないみたいだね…。誰だつたんだろうあの人。」

「ほーら、置いてくわよ？」

「あーーー！ 待つてよーーー！」

二人はステラクロックの出口へと向かって行った。

7 · Track Track

ステラクロックのある駅から電車で約1時間。各駅停車なのでここまで時間がかかってしまうが、どうやら香恋や水樹には物ともしないようだつた。

そして、近くの駅で降りてからバスを使って30分。目的地の星ヶ丘丘陵公園に一人は到着した。

星ヶ丘丘陵公園は、大きな森や川があり、沢山の大自然の中でキャンプが出来る、北海道でも有名なキャンプ場だつた。

夏のこの時期ならばカシワやクヌギの木を注意深く探せばクワガタムシや本来北海道にはいないカブトムシも見つかる、子供たちにも人気のスポットだ。

他にも星ヶ丘という名がつくように、大きな丘には見晴らし台が付いており、天体観測にも持つて来いの場所だ。

「おーい麗音ーー！」

「おー香恋。水樹も一緒だな。」

「二人とも一緒にきたの？チーム谷で。」

「「俺らはチームを組んだ覚えはねえーー！」」

二人、息ぴつたりである。

と、時刻が9時と少々早い割にはぱらぱらと人が集まってきた。やはり、家族連れが一番多く、香恋たちのように高校生は居ないようだ。

その中に天文部のメンバーも混ざっており、全員これでそろった。

「そういえば顧問は連れてきたの？」

「あ？ 邪魔だから連れてこないよ？ 居たら夜騒げねーじゃん！」

「…保護者がいなかつたら泊れないでしょ…」

「大ジョーブ大ジョーブ！ もうバンガローは予約してあるぜ？」

「へえ。二人でもうチェックインしたんだ。」

「あ、ああ…。な、なあー天！」

「お、おうーーほら、みんな揃つたことだし、バンガローに荷物置
いつけーー！」

何やらデギマギしているチーム谷であったが、この頃はまだ、自分たちの行動を後悔することはなかつたのだった。

谷が率いる天文部メンバーはキャンプ場の外れにあるというバンガローを目指し、歩いていた。

そして…

「ここが俺らのバンガローだ！」

天が張りきつて皆に説明するバンガローは意外にも香恋たちが想像していたのよりも大きかった。

ログハウスと言つた方が良いかも知れない。

一応、バンガローの隣にも皆で焼き肉が出来る

スペースがあり、設備に関しては申し分なかつた

そして、極め付けにはドアの前に続く古い線路。飾りの様なものだ
ろうが、果たして必要性は如何に。

「あら、御洒落ですわね。ちょっと古めかしいけど……。」

「駄洒落？」

「お前のよつこいのバンガローは『駄』田じやねーよー。」

パカアンツ

本日、1回目の殴りである。

「痛い。」

「… おい桜… あんなに書つてた割にははしゃいでないか?」

と、ハッピセット兄が問う。

「ハッピーセットじゃねーー！ハッピーだよーー祭に着る奴じゃねーー！」

「…だから誰に突っ込んでるの？」

ハッピーセットには突っ込まないのですね。
まあそんなナレーションはともかく。

「そ、そんな分けないじゃないですかーー。（。 。 ；）
私は嫌々來たんですよ～（*。 。 *）」

「（その割には顔文字が嬉しそうなのは突っ込まないでおこう…。）

「

「…」の線路…。使われてたみたいだね。」

「廃線になつたのかなあ。でも、線路がバンガローの上にあるね。
途中で途切れないので階段の下に潜り込んでるー。」

「バンガローの上を線路が走つてどりすんのよ…。」

水樹が顔に手を当てて呆れる。そして、バンガローの裏を見る。

「バンガローの逆側は…森みたいだね。木々が生い茂つてる。」

「水樹…探偵みたいー…かつこいー…」

「ほら、ドア閉めるわよ。」

「切り替えはやつー？待つて閉めないで…ーーー！」

「……よし、昼まだ時間あるし、探検に行くぞーーーーー！」

威勢良く天が言つ。

「探検つて…この山の中？」

「 そ う だ ザ ！ 何 か 新 し い 発 見 が あ る か も し れ な い ！」

「何の発見だよ。俺はバス！」

「乗り気じやねーなあ大和は……。他、行く奴いるか?」

「私行くよー！」

「いやー俺も行こうか。

「私は食材の下ごしらえと釣りをしてきますわ。この川には新鮮なヤマメが住んでます。」

「え？ お前釣りできるのか？」

「勿論ですわ。良い魚、釣ってきて皆さんに振舞うため、頑張りますよ！」

「んー、じゃあ桜と羅夢たちはほんじで御留守番かな？大和は用心棒つて事で！」

「用心棒つて…。水樹はどうすんだ?」

「「」のおちやらけ天然娘をこの一人に預けるわけにはいかないでしょ。」

「それもそーか。把握。」

「お、おちやらけ天然娘…。」

「よし決定!—じゃーチーム谷探検隊、出動だ!—!」

「…何気に氣に入ってるじゃんそのあだな。」

「とつあえず、この線路沿いで行こうぜー。」

「やうだね。なんか面白そうだし。」

チーム谷の4人は、星ヶ丘丘陵公園展望台の森林へと着ていた。そばには川などがあり、整ってはいないものの、綺麗な森林だった。しばらく4人が飾りと思われる線路をたどっていくと、道の脇に花が咲いているのを香恋が見つけた。

「あつ、可愛い花！！ステラクロックみたいー！」

「ホントだね。おしべかな。3つ飛び出てて可愛い。」

香恋は根っこからその花を摘むと、まじまじと眺めていた。その花は色は黄色、おしべが横3方向に広がっていて、まるで時計の短針、長針、秒針のようだつた。

そして花弁が12枚と、その上には棘状の小さな花びらが沢山ついている。

その形は星の形をしたあのステラクロックの様で綺麗だった。

「…なんだあ？この花。見たことねーぞ？」

「あー…この花の図鑑からしても載つてねーな。トケイソウって花には似てるけど。」

「トケイソウかあ。あ、こいつには実も生つてゐる。」

「おおー。美味しそう…。トゲトゲだけど。」

「やつぱトケイソウの仲間だな。これはパッシュコンフルーツって呼ばれてるやつだ。」

「ちょっと中身割つてみろよ。美味しいいらしげ?」

香恋はやつぱ言られて、興味本位で割つてみた。すると、中身から果汁が溢れだしてきて、ちょっと星の形になるよううちに実が詰まつていた。

「美味しいーー甘酸っぱいし、ジャムにしたら美味しそうだね…。」

「…案外イケるかも。」

水樹にも好評のようだ。

「…だが、何故こんなとこに野生してるんだ? 原産地はアフリカだし、トケイソウなんて園芸でしかみないぜ?」

「それに、黄色い種類なんて無いよな。この図鑑には…。もしかして新種?」

「生育には一定の温度が必要で、越冬には最低でも4 以上の温度が必要である。」

「亜熱帯植物のわりに高温を嫌い、30 以上の気温が続くと、高温障害を起こし、花芽や未熟果を落とさせることがある。」

「あ? 香恋、お前そんなに詳しいのかー?」

「ウイキペディアから引用したー。」

「…あ、そう…。」

「ただ、それなら…この寒い北海道では子孫を残せるわけがないよね。4以上も真冬は無いよ?30以上は無いけど…。」

水樹は周りを見渡す。

その眼に映っているのはいつもの森…

のはずだった。

「…えつ。」

「…私のおやつ、取つた。」

「はあ?お前今それ喰つてるだろ。」

レオンが香恋に囁つが…

「違つたり違つて…私じゃない…」

「あ?じゃあ誰が…って…」

「…

一同4人が石の様に固まつた。

線路の続く先のほうを見ると、小さな小人のよつな子供が立つてたのだ。

人間にしてはあまりにも小さく、大きなフキの葉っぱを傘のよつて使つていてることで一層小ささが際立つ。その子供はまた同じ言葉を繰り返した。

「私のよつ、取つた。」

「……ち、ちつちやくないか?」
「人間にしては……。」

「私の頭をつかんで言つなあ!」

「つあ、間違えた!」

「冗談じゃないのかよ!」

「シッ!」
「あつてゐる場合じやないでしょ!」

「おやつ、返して。」

小さな小人は女の子のよつだつた。
どうやら、この子は香恋の食べてしまつたパッショングルーツをやつにしていたらしい。

「…ああーゴメン、ごめんね!悪気はなかつたの!」

香恋は半分にしたトケイソウの実を女の子にあげた。

「おねえちゃん、良い人。あたし、お礼する。」

片言で日本語をしゃべる女の子。

「いやいや、私はあなたのおやつを半分取っちゃったの。だから、お礼するのは私の方だよ?」

「おねえちゃん、あたしに、お礼?」

「うん、そうだよ。迷子かな?送つてあげるよ?」

「あたし、迷子じゃない。『チセ』、出てきた。あたしの『ハボ』、怖い。」

「ああ……?チセ?ハボ…?なんじやそりや」

「……ちよつと待つて。何か聞いたことあるよ……」

水樹が考え込んで、小さな女の子に一つ、お願いをした。

「ねえねえ、『ピリカメノ』ちゃん、あなたの『ピタン』に案内してくれるかな?ハボと仲直りしよ?」

少々考え込んで女の子は言った。

「「」うちのおねえちゃんも良い人。『ピタン』案内する。ついてきて。」

「

女の子は小さく駆け足で線路の上を器用に走つて行った。

「…上手くいったみたいね。」

「おいおい水樹、やつきから何を会話してたんだ？」

「…あんまり言ひとまぢやうなんだけど、あんたたちには言わない
と話が通じないわね。」

多分、予想なんだけどあの女の子は『アイヌ民族』か、『コロポ
ツクル』っていう妖精よ。」

「えつ！…妖精さん！…？」

「…マジでそんなものがいるのかよ…?…じゃああの子の名前は『ピ
リカメノ』ちゃんって言ひのか?」

「バカ、分かるわけないでしょー。『ピリカメノ』は熟語よー。」

『ピリカ』はアイヌ語で『可愛い』とか『美しい』とかで、『メ
ノ』は『お嬢さん』とか『娘』って意味よ。

だから私は、『可愛いお嬢ちゃん、貴女の村に案内してもらえた
いかしら?お母さんと仲直りしよう!』って言ひたのよ。」

「アイヌ民族・絶滅したんじゃなかつたんだあ…。」

「アイヌ語自体は今にも残つてるわよ?例えば札幌。札幌は『サツ
ポロペツ』っていう『渴いた広大な川』って意味。

世界遺産でも有名な知床は『シレトク』…地の果てって意味から
来てるのよ。」

「水樹、詳しいね…」

「伊達に北海道学つていう教科、取つてないわよ?」

水樹は得意げな顔でそう言ひた。

「うへおー! ? おのちつちぢみのばー? 」

「…しまつた…見失つた…」

「おいおい！もしかして俺ら、幻覚でも見てたんじやねーのか？」

「… そうかもね。妖精を見るなんて、今考えてみてもバカらしいわ。

1

「 ひいひいわびわび 」

「でもさ、でもさ、私の取つたトケイソウの実、無くなつてゐよ?」

「それだつて幻覚だつたんじゃねー? ほら、回り見てみろよ。」

言われるがままに香恋は周りを見る。

ている。当然、木の実もだ。

「あれ！？あれ！？無い！！」

集団幻覚ね。多分、この森には麻薬植物などが生えてるんでし

۱۷۰

「納得いかないつ！！」

香恋はブリブリし始めた。この幼い癖は小さいころから直らないらしい。

「ほら、帰るわよ！」

「えーーー!? まだ探検してねえぞーーー!」

「うーつさいわねえ。ホントに麻薬だつたらどうするの！行つたん
バンガローに戻つて夜の星の観察まで休んでなさい！」

「はーい。」

「はいは短く！！！」

「はいはい！」

「ハイは1回つつ！－！－！」

4人はその線路の道を後にして、香恋がトボトボ歩いた後ろには香恋のポケットからはみでた黄色い花が落ちていた。

「ホント！ホントだつてば！ホントにコロポックルを見たの……」

「……一緒にいた3人が違つて言つてゐるのにどうしてホントなんだよ……。3対1だぞお前。」

「そ、それは……」

香恋達は焼き肉をしながら談笑し合つていた。
時刻は6時。夕飯には少し早かつたが、星を見に行くのに道具を持つていかなければならないので、早めの夕飯だ。

「まあ、ここのキャンプが終わつたら一応4人で病院行きましょ。気化した大麻だつたら困るし……。」

「ああー、こいつは既にラリつてゐるから今連れてくか。」

「ラリつてない……むしろレオンの方がラリつてゐる……」

「ああ？（もふもふ）」

レオンは肉を頬いつぱいに頬張りながら生返事を返す。

「あーー私のカルビ取つたなーー！」

「かつぱえびせんなりこにあるぞ。」

「それはカルビーーーーなんで夕飯にお菓子なのよーーー！」

「まあまあ水樹、私が釣ってきたアユがありますわー！」

「そお？じゃあ、頂こうかな。」

水樹は程よい加減に焼けたアユを手にとつて豪快に齧り付いた。

「あら、おいしいわね！」

「勿論、私が釣つてきましたからー！」

「まあー誰が釣つても同じだけどなー…ガハアツ！？」

天が美海にノールックチョップをされた。ノールックバスのチョップ版である。

「…なんか芋喰いたいな。芋。フライドポテト。」

大自然の中で無茶を言ひつ幸村兄。

「無理言わないでよ。油で揚げるのは山中では不可能よ。」

「マック行つて来いよ。ハッピーセットとしての振りだろ？それ。」

「墓穴掘つた……」

「バカ兄貴。」

この談笑焼き肉パーティは午後8時まで続いた。

そして時刻は8時半。

「よし、出発だ！！」

「もつ星空が綺麗だね。あ！あれ、夏の大三角じゃない？」

「あれがデネブ、アルタイル、ベーガ」

「君は指さす夏の大三角（）。。。（）ノ」

「おーぼーえーてー空ーを見るー」

香恋、桜、羅夢が某凄い細胞の化物の物語のテーマソングを歌う。

「アレガなんて星、あつたか？」

「…それじゃあ夏の大四角形じゃない！！」

パコオニッ

と、レオンは水樹に殴られた。

「…お願い事、叶えてくれるかな。織姫様と彦星様。」

「あら、ロマンチックですね香恋ちゃん（*、＊、＊）」

「そんなんじゃないよ。／＼」

「あれ、流れ星にお願いしたんじやないの？」

「うんとね、丁度近くに有つた短冊のお願い事カードにも書いてきたんだ…」

「…欲張り娘」

「…あれ？ こいつちがい込んだりするのか？」

と、レオンが言つ。どうやら先に探索はしてきていたらしい。

「…あ、こいつけじやないわよ。こいつは私達が脇間に探検してきた方向でしょー」

「こつけねー… こつかりしつかりけりやどかり忘れてたぜ…」

「私の持ちネタ取るなあ…！」

「持ちネタつ…? ? ? しかもなんか増えてねー?」

とこつわけで、一行は全く違う方向へと来ていたのである。ついでに言つてしまつと、迷つたのだ。普通は迷うはずの無い一本道だったのだが、来た道は既に獣道に成つていた。

それでも、その荒れ果てた道には赤さびで覆われた線路がある。

「…私たち、こじ通つたつけ？」

「…ううん。こんな荒れた道は歩いてないよ…。」

「…ダメだ、スマホのGPSも圈外だ…」

最新式のモノには目がない大和が言った。

「おいおい、こんな星明かりしかないところで迷ったのかよ？」

「元はと言えばお前が先頭切るからだろ！…」

「ああ？何イ？お前らが付いてきたんだらうが！…」

男子三人がケンカを始める。が。

「…うーるさいっ！…！…喧嘩しても無意味だつてことが分から
ないの！…」

「…すんません。」

「サー…セン…。」

水樹による一括で三人は小さくなつた。

「…つて怒つて見たは良いけど、どうすれば…」

「…私達は南から來たんだから、南に戻ればいいんだよね？」

「うん…やつだけど、どうするの？」

「ほり、みんな天文部でしょー。あの夜空に見える北斗七星を使って
方角を調べるんだよー！」

自信満々に演説を開始する香恋。しかし…

「香恋の言ひ方」とだから並べてこななりなこせ…」

「酷いツツーーー?」

涙目で訴える香恋。
気を取り治して…。

「あの北斗七星のひしゃくの先を見てーその先には綺麗な明るい星
があるのでしょ?あれが北極星!
で、北極星のある方向が北ってわけだから、逆の方向に進めばい
いんだよー!」

「おお、マジか!?その情報ーー!」

「つざーつて事ばーあつただよーー!」

「……ひん。お前、やつぱ首絞めて良ー?」

「……え?」

香恋はその先を見て驚愕した。

通つてもいない怪しげなトンネルがあつたのだ。その先に。

「嘘だつたのかよーーー!」

ギリギリギリ

「待つて待つて首しまつてゐる。……鹽じやないよ。……つ。……キコウ～」

「ぱたん。と、香恋はレオンに首を絞められて力尽きた。

「加減しただる。早く起きろよ。」

「まつたぐう……でもなきやうは黙かつたのにこきなつトンネルが……」

「……先は真つ暗で何も見えなつよ？（――――）」

「お先真つ暗つて奴ね。」

「諦めるのかよ――」

「……星の研究かいじやねーな……。でもよ、線路はトンネルの中続いてるやつ。」

「……つてか、線路迷れば戻れるじやん。」

「あ」

「……あ」

「あ、じやねーよあじやー……。」

「でもさ、後ろに線路、無くなつてゐるよ……。」

「…………え…………？」

全員が香恋に言われて振り向くと、確かにそこには線路が跡かたもなくなつていたのだつた。

「おーおー……肝試しは12時からの予定だぜ……？」

「やるつもりだったのかよ……つか、今はそんなことどうでもいいな……」

「……仕方ないですわ。先に進みましょ、うよ。」

「そうだね。先に行くしか選択肢が無いなら、行こう、うよ。」

一同は全員トンネルの中へと入って行った。

「……暗いな……明かり、持つてるか？」

「はい。懐中電灯。」

パツヒ、明るい光がトンネルを照らす。するとそこにはいくつもの落書きがあった。

「ここの先、アイ……ロボ……タン？ 文字がかすれてて読めねーな。」

「……小さい人の絵がたくさん……不気味だね……。」

「……これ、パッシュショングルーツですわね。寝てる人に食べさせてい るよつな……」

美海が一つの絵を指して言った。

「北海道にパッショントルーツなんて育たないよ？寒過ぎて……。」

「パッショントルーツ……」

水樹は何か閃いたかのように、突然あたりを見渡す。そして、お目当ての絵があったようで、全員をこっちに呼ぶ。

「……みんなこっち来て！　私たち4人は、見覚えあるよね……？」

「……」れは……

「ホシトケイソウ！　！　！」

香恋が摘んだ、一輪の花がそこには描かれていた。少々いびつだったが一度見た人なら分かる。

「……ステラクロックみたいな形だね。」

「……花弁が12枚で、おしべも3つ3方向に開いて……まるで時計みたい……（。。。）」

「……水樹！　私、そのステラクロック、探してみる……」

「あ、ちょっと待ちなさいよ香恋！　！　！」

香恋は仲間たちを置き去りにしてホシトケイソウを探しに行つた。しかし、探しに行くまでもなく、待っていたかのようにトンネルの出口に一輪だけトケイソウが咲いていた。

それはホタルの様な光を纏つており、若干明るい夏の夜では一層不気味に、かつ美しく見えた。

「……なんで……入つてくるときは無かつたのに……」

と、流石に恐怖さえ覚えた香恋だつたがトケイソウを摘み取り、持つて仲間たちのところへと戻つた……

までは良かった。

香恋がそのトケイソウを持つて後ろを振り返つて走つて行ったあと、トンネルの出入り口は花弁が閉じるように空間を塞いでいった。

1枚、1枚、合計、12枚の花弁が段々と閉じて行って完全に出口はふさがれた。しかし、その事には香恋たちは気づいていなかつた。

「ステラクロック、見つかったよ……！」

「……」

しかし、香恋の言葉に一同は反応しない。

「……みんな、どうしたの？ステラクロックはあつたけど……」

「人が死んでる……」

「……なつ……」

「女子は」つちを見るなあツー！」

しかし、大和のその言葉はもう既に遅かつた。

出口のふさがれたトンネル内に女子勢の悲鳴が反響して全員の鼓膜にダメージを与える。

「うがつ！？お……い……叫ぶんじゃねえ……」

麗音の怒鳴り声も同じように反響して、泣き面に蜂だ。

……落ち着きなさい留一一急いでJIIから脱出するよ……。」

水樹の掛け声とともに出口へと向かう。しかし…

「…なんで…なんで出口がふさがってるの…」

最初に驚いたのは香恋だった。最終的に最後に入ったのは香恋だからだ。

「チツ…逃げられねえって事かよ…上等じゃねえか…」

「……羅夢、遺体の状態を見てくれ。」

「ええ。……おそらく、死後半年から一年は経過している。白骨化

してゐし。

でも、損傷が少ない……あ！！

羅夢と大和のハッピーセットが遺体を調べる。
羅夢は何かに気付いたようだ。

「どうした？」

「ミイラ化してゐる首にかすかな索条痕さくじょうこんが有るよ。何か、縄みたいな
もので絞め殺されたみたい。」

「さすが、母親が警察なだけあるね…。」

「…」

軍手を履いた大和が遺体のバッグから何かを見つけた。

「…ステラクロック…」

バッグの中から大量のホシトケイソウが見つかつた。
ただし、それは半年以上も経過しているためか、干からびて一部は
粉状になつてゐる。

「…待てよ…おかしくないか?」の遺体…。

「え? なんで…?」

「よく考えてみろよ。半年から1年の間に死んでゐるのなら、季節は
冬か秋だぞ…。

この干からびたステラクロックはどう説明するんだ?」

「…どうして…どうもないけど…」

「バカかお前は。お前のそのステラクロックを摘んだのはつこさつきだ。

それゆえにこの花が一年草ならば春から夏にかけて咲く花だ。そして死んだ時期は秋か冬。

当てはまるわけがないんだよ……」

「もしかしたら俺らの検死が間違ってるかもしねいぜ？親の見よう見真似だしね。」

「……まあその可能性を指摘されると反論は出来ないがな。」

麗音は腕を組んで言った。

「……なんでこんなにステラクロックが必要なんだろう……。」

「……簡単じゃない。私達の体験したことと照らし合わせねば。」

落ち着いた口調で、だがどこかに不安げな表情を浮かべて話す水樹。しかし……

「……つ……？」

「な、なんだこの痛みは……？」

「くつ……頭痛が……ッ……」

突然、麗音と天、水樹が苦しみ出した。そして……

とどけいかで小さな機械音が響いたのを香恋は聞き逃さなかった。ただ、3人が苦しみ出したのでそんな事はどうでもよかつた。

「水樹！？麗音！？！」

「お、俺はどうでもいいのかよ…ツ」

「しまつたつ忘れてた！！天大丈夫！？」

「テメーの…頭の方が心配だ…ぜ？」

「こんなときに突っ込みをするな…！」

「救急車は…？」

「ダメだ…！ケータイが繋がらないっ！…！『圈外だツ…』

「とりあえずこの3人をおぶつて外へ避難だつ…！」

苦しむ3人を背負つてトンネルの外へ出ると、そこは小さな集落のある村だった。

真つ暗で明かりもなければ街灯も無い。ただ、月明かりと懐中電灯のおかげで家が確認できるだけだった。しかし…

「家が…小さい…？」

と、大和が言った瞬間にトンネルが一瞬にして消えてしまった。
代わりにあの鋸びれた線路がまた後ろに続いていた。…暗闇の森の中。

「…もう、怖いですわ…」

半分泣き田になつてゐる美海。いつもは強氣の美海もさすがに耐えられないまでに來ていた。

「…俺らは…いいから…お前らだけでもあの…線路を通つて帰れ…
「ダメだそんなの…お前らを置いて帰るなんて出来るか…!…みんな仲間だろそんなこと言つんじやねえ馬鹿野郎…!…」

大和が怒ると、天は微笑んで大和の背中でまた眼を閉じた。

麗音も目を閉じてしまい、3人は全員氣を失つてしまつてゐた。
水樹は羅夢の背中、麗音は香恋の背中で目を閉じていた。
息はゼエゼエ言つてゐるので、命はあるがそれも持ちこたえるかどうかは分からぬ。
ただ、疑問点がある。

「…何故、この3人だけが突然倒れたんだ?」

「…そうね。逆に言えば、『何故香恋は助かっているのか』とも考えられる。」

「なんで?」

「…お前らだけ一緒に行動したのに、お前は助かってる。その間に

何かがあつたんだ。

原因はそれしか考えられん。他は無事なんだから。」

「……」の3人に訊くのはほぼ不可能だし、香恋が答えなきや「」の3人は助からないわ。多分。」

「……「へーん……。」

力チツ

「ん?」

「なんか、今……機械の音が聞こえたよ!」

「……」の音、わざわざもしてたよ。これで2回目……?」

「待つてください香恋ちゃん。その花を……」

「これ?」

桜にステラクロックを渡すと、じつと見つめる。

すると、自分の腕時計と比較するように見た。そして……

「……信じられないかもしませんが、この花、『正真正銘の時計』ですよ。

『ほり、』の一番長いおじべを見て。『の腕時計の秒針のように動いてるでしょ……? (・・・、)』

「……ほんとだ……」

香恋の体感だが、確かに一秒"」とこ一一番長いおしべが一定間隔で回つていた。

「……何故か私の腕時計の進み方が恐ろしく遅いんですけどね。（・・・）」

「……なんだつてんだあ！？」の世界は……！植物なのに時計のよう動くなんて……。

不思議の国のアリスかよ！？

「お兄ちゃん、それ、星の時計。ホントの時計だよ。ウサギさんも居ないし。」

「え？ 羅夢、今俺の事お兄ちゃんつて……」

「呼んでないわよバカ兄貴！……」

「じゅあ今の世……」

「私はここだよ。お兄ちゃん。お姉ちゃん。」

と、先ほど香恋があつた小さな妖精がそこにはいた。

「ああ……ピリカメノコひちゃん！……」

「お姉ちゃん、今は夜だよ。騒いだらみんな起きちゃうよ。

それに、私の名前、そんなのじゃないよ。ポポって言つてさだよ。」

「これが……香恋の言つてたコロポックル……」

「可愛いつつ……」

「ポポちゃん……、ポポちゃん！星の時計つて？」

「そのお兄ちゃんたちの残り生きられる時間を示した時計だよ。花弁が1~2枚、1夜に一枚落ちるんだよ。

カウントダウンするの。死へのカウントダウン。」

「ポポ……と名乗る小さな妖精はトンネルで出会ったときよりも言葉遣いが現代風になっていた。

「残りの……生きられる時間……だと……？」

「その花の花粉には毒が入つてゐる。1~2日しか生きられない毒が。それを吸つちゃつたんだよ。そしてあなた達全員も吸つちゃつてる。だから私の後についてつて言つたのに。解毒剤、あるのに。」

「いや、アナタ足が速かつたから……」

「え？あ、『めんなさい』。」

ペコリ、と礼儀正しくお辞儀をするポポ。

「でもそ、一つ聞いていいか？」

人差し指を立てながら言つ大和。さながらオールバッくの刑事のようにも見えた。

「はい。どうぞ。」

「さつきのあの遺体は？同じく毒にやられたのか？」

「遺体？……？」

ポポは何も分かつていない様だった。

「あー…知らないなら良いんだ。それと、もう一つだけ。こいつは、その3人と一緒だったのに何故無事なんだ？」

大和は香恋を指さして言ひ。

「お姉ちゃん、私のおやつを食べたから。苦しまないだけ。でも、私も同じ。もう木の実ないから12日しか生きられない。

今は何も聞かないでこの木の実を食べて。解毒剤。4つしかないからどうするかは自由だけ…」

ポポは香恋に木の実を4つ渡した。その木の実は昼間に香恋が半分だけ食べたパッショングルーツだった。

「口口ポックル、毎日それ食べてたから生きてるの。家の周りにはその花が群生してたから。でも、村が人間によつて破壊されて今はポポの家族しか居ない。

だから、これが最後の木の実。木の実全てを食べれば毒は全て消えて生きられる。木の実を半分食べれば苦しますに12日後、死ぬ。

食べなければこの3人のように苦しみながら死ぬ。半分食べさせればこの3人も苦しみからのみ解放される。どうするの？」

「私はさつき半分食べたから、みんなで分けて。」

「私もお姉ちゃんに半分もらつたから数に入れないでね。」

「…分かつた。木の実は4つ…半分にすれば8欠片。7人の苦しみは助かるって寸法か。」

「でも、誰も助けなくて良いの？下手したら全員12日後に死んじゃうんだよ？」

全員が黙り込んでしまった。

無理もない。全員が全員、まだ青春真っ盛りの高校生なのだ。部活に燃える人や恋に燃える人、習い事に燃える人、勉強に燃える人。すべてがこの天文部に居るのだ。

そこで大和が恐る恐る口を開いた。

「…俺は、死ぬときは一緒に死ね…？」

「大和…」

「兄貴…」

「そうですわ！私も大和さんと一緒に死ねよー自分だけが助かつたつて嬉しくありませんもの…！」

美海も同意見のようだった。

「じゃあ、皆で半分ずつ分けるって形で良いの？」

小さな口ポックルが聞く。

「うん！みんな優しいからね…よいしょ。」

香恋は木の実を半分に割り、3人の口に放り込み、よく噉ませてから飲みさせる。

「…数十分で効果が出てくるはず。余ったこの半分の木の実はどうするの？」

「…捨てちまつのももつたいないしな…。」

「持つて行きましょう。この半分を誰かが食べれば生き残れるんですけどから。（・・・）」

桜は小ビンの中に半分の木の実を大切にしました。
半分の欠片の木の実は、静かに呼吸をするかのように小ビンの底に転がっていた。

「そうだね。…でも、私たぶ、この12日間どうすればいいの？もうパッシュンフルーツは無いんでしょ？」

「村が全滅したからもう無いの。でも、村に無いだけでもまだ希望はあるよ。」

「…」の大森林の中から探すのか？」

「うん。」の森にも無いよ。全部やられた。でもね、ノチウカムイの塔のてっぺんで星に願うとお願い事が叶うんだって。」

「…ノチウカムイ…？」

「願懸けかよ…正直言つちまつと、それ、当てになるのか？」

「…分からない。私も行つた事無い。でも、今はこれしかない。でも、遠いの。」から大体250キロも先だつてばっちゃんが言った。」

「…ばっちゃんつて…」

「…ボボちゃん、その塔に行くのは良いんだけど時間が無さ過ぎるよ。12日つて…食料もなれば交通手段も無い。」

それに、12日も行方不明だったら捜索願いってのが出されて捕まつちゃうよ。」

「それは大丈夫。」はお姉ちゃんたちの世界とは違う世界だし、

時間の流れが違うの。

「このステラクロックの時間は腕時計とかの時間とは違うよ。腕時計をよく見て。24秒に1回動くはずだよ。」

桜は言われたとおりに腕時計を見て、24秒数えた。

「22、23…24!! ホントだー!! ; 。 。 」

「つまりは…こいつで12日過いでしても、実際に半日しか経過しない計算になるな…。」

「なんで?」

「アホか…」¹ では時間の流れが1/24。で、1日の長さは24時間。丁度一日当たり1時間しか経過していない計算になる。つまり、12日で12時間。半日のみだ。」

「おおー!!」

「あのトンネルは別の世界への扉だったのか…。」

「時間はクリア…後は食料と交通手段だが…。」

「食べ物は、サバイバルだよ。仕方ないの。私達もそりそり暮らしてきた。

でも、交通手段はあるんだよ。」

と、ボボはとてとて…と、古ぼけた線路の上に立つてフキの葉っぱで作った草笛を吹いた。

その音色は森林中に響き渡り、いつのまにかフクロウやモモンガな

どの鳴き声も一緒に響き渡り、大合奏となっていた。

「…すげえ…」

「なんていうか…神秘的…」

と、感想を言つていると線路の続く森の中で何やら轟音が聞こえてきた。

「森が…動いてる…」

森の木々たちが一斉に線路の上から退いたのだ。
まるで足のように根っこが歩き、倒れた丸太は「ロロロロ」と転がつて邪魔にならないようになつた。

そして、その先からはライトが見える。

「…電車…?…?」

「…いや、違う…。電車よりもっと短くて大きい…」

「あ、あれは…!…!」

全員の視線の先には、つい先ほどまでそこで楽しく談笑していたはずのバンガローが線路の上を走ってきていた。

「…んなアホな…」

大和は衝撃と笑撃を表情にあらわにして不思議な感覚に陥った。

「フォレストレイン…。みんなはそう呼んでた。でも、人間がキヤンプ場にしちゃつたから、フォレストレイン、動かなくなつた。」

「…あのバンガロー、ホントに線路の上を走るんだ…。」

「ばんがつたね！！」

「…」の状況でよくダジャレ言ふるなお前

家の走る線路は徐々に伸びて行き、ポポが草笛を吹いた少し後ろで止まつた。

「ところで、さつきは時間の流れが違つて言つてたけど…」の世界に人間は？

「普通は居ない。どうからかあなたたちみたいに迷い込んだてきた人のみ。

さつきの比喩表現通り、ここは不思議の国。言つなればアイヌと「ロボックルの楽園。

世界は同じでも時間軸が違つてゐる。何もかもが同じじゃない。」

「…」

「夜空に同じホシが無いよつこ、この世界に同じものは存在しないんだよ。」

夜空を見上げながら犬よりも小さな少女が言った。その姿はどんなに大きな生き物よりも強大で寛大に見えた。

ポポ含めた天文部の一団は列車式のバンガローに乗り込み、足場の悪い線路の上を走っていた。

「確認するよ。私達はノチウカムイの塔へ行ってお願い事をする。そして、それがホントでも嘘でも懸ける事に変わりはない。そして、この後どんな困難に遭つか分からぬ。それでもこの急な旅は続けるんだよね？」

「ああ……。それしか助かる手立てが無いのならな。」

「あの遺体と同じくなつちやうからね……。」

「……あの人、名前は『牛木亮輔』って言つみたい。手帳を持つてきただよ。」

と、羅夢が遺品であるはずの手帳を持ってきてくる。

「お、おい……遺体の遺品を持ってきたら……」

「だつてここは人間界じゃないんでしょ？迷い込んだ人の遺品は手掛かりになるかもしないじゃん……。」

「……それもそうだな。俺たちまであんなつまつたら本末転倒だし

な。」

「手帳には何で？」

「…手帳つていうか、日記みたいになつてる。…日付は擦れてて読めないけど…」

『…可笑しな世界に迷い込んだみたいだ。人間が全く見当たらぬい。居るのは沢山の動物たちと小さな小人だ。』

「この小人は人間が珍しいのか、すぐに近くに寄つてくる。可愛いものだ。』』

「…ポポの仲間…。」

「マジかよ…続きを読む？」

「『小人から聞いた話では、この世界の途中で5つの鍵を見つけ、ノチウカムイの塔へ行くと助かるらしい。』

「その5つの鍵はとある屋敷に隠されているといつ。少し気になるので、小人に同行してもらい、旅に臨むとする。』』

「…死亡フラグ…」

「続きを読む。」

「『口クなモノを何も食べずに3日が経つた。流石に限界だ。手持ちのこの木の実も底を突いた。』

「あれほど量があつたのにも関わらず麻薬的な美味しさを持つていた木の実だったのですぐに無くなつてしまつ。』

「あの木の実が成つていて一年草をバッグに出来るだけ詰め込んだ。もしかしたら木の実になつてくれるかもしれない。』』

「… ポポちゃん、やつぱこのホシトケイソウは麻薬なのかな？」

「… 分からない。まやくって何かが分からぬから。でも、お父さんは葉っぱを丸めて火を付けたりして吸つてた。」

「… 一種の趣向品だな。煙草に似たようなもので依存性が高いのは間違いないな。」

「続きは？」

「… なんか、日記みたいで手掛けがありそつにもないから最後のページ読むね。さつきのページから4日後。

『化物屋敷から出られない。解読不能な暗号があり、それを解けば出られるらしいのだが私には不可能なようだ。

小人もここまで付いてきてくれたが、いつの間にか屋敷から姿を消した。暗号を解いてしまったのか、それとも私の幻覚なのか。

しかもバッグに入れていた花が時計のように動いていて、花弁がもう一枚しかない事に気が付いた。これは何を示しているのか。

結局木の実には成らずに、乾燥して粉になってしまっているのもいくつかある。… 薬の一種のようなものだと小人から聞いたので、

「… 今夜はこれを吸つて眠るにしよう。」

「… これがこの人の最期つてわけか…。」

「屋敷…か。そこに5つの鍵があると。」

「… ねえ、ちょっと待つてよ… その人は木の実を食べてるのに何故死んでるの…?」

「…冷静になれ香恋。あの遺体には索状痕があつただる。ところどは、誰かに殺されたとしか考えられない。

だが…ポポに一応聞いておくが、12日たつた時には苦しんで死ぬのか？」

「…分からぬ。でも、あの木の実の効果が12日つて聞いたことがあるよ。私たちコロポックルも毎日木の実を食べてゐわけじゃなかつたし。

あの花の毒の効果も12日、木の実の効果も12日だとすれば多少のタイムラグが発生してしまつかもしれない…。」

「…数分は苦しむかもしれない」とか…。」

「…そういうえばポポちゃん、随分日本語が達者になつてゐるわね。どうして？」

「…コロポックルは成長のスピードが極端に早いの。ただし、寿命も長くて300年だつて。

木よりも早く死んじやつたら守り神の意味が無いからね。やつぱり、成長が早いと言葉も覚えるのが早いのかなあ。」

言葉のおかげかどうかは不明だが少しだけポポが大きく見えた。そんな気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6770v/>

STELLAR CLOCK

2011年11月27日12時54分発行